【別紙：２（６）】研究発表一覧表

招待講演
・コルネリア・ド・フォーゲル講演
マリオ・ヴェジェッティ（イタリア、パヴィア大学）
「プラトン『国家』が非政治的に扱われるようになったのは、いかにしてか、またなぜか」

・フィロロギカ講演
ヘラルド・ボーテル（オランダ、アムステルダム自由大学）
「『責めは選ぶものにあり』しかし誰が選択をするのか？　プラトン『国家』を新校訂本（Oxford Classical Text）で読む」

全体会
ラファエル・フェルバー（スイス、ルツェルン大学）
「すべての魂が求め、そのためにすべてを行うもの」
フランコ・フェラーリ（イタリア、サレルノ大学）
「真理から確実性へ：プラトン『国家』における問答法（と知性）」
G・R・F・フェラーリ（アメリカ、カリフォルニア大学）
「プラトンの著作家的ユートピア主義」
チャールズ・H・カーン（アメリカ、ペンシルベニア大学）
「イデア教説の哲学的動機」
イルムガルド・メンライン―ロベルト（ドイツ、テュービンゲン大学）
「プラトン『国家』における（下位）世界の構想」
デブラ・ネイルズ（アメリカ、ミシガン州立大学）
「アテネの文脈におけるプラトン『国家』」
クリストファー・ロー（イギリス、ダーラム大学）
「『国家』における正義と他の諸徳：誰の正義、誰の諸徳？」
トマス・スレザーク（ドイツ、テュービンゲン大学）
「プラトンの国制：構想、行為、哲学概念」

ポリス・パネル
栗原裕次（日本、東京学芸大学）
「『国家』第九巻におけるプラトンの「真正」の僭主」
メリッサ・レイン（アメリカ、プリンストン大学）
「立法としての基礎づけ：プラトン『国家』における立法者の姿」
フランシスコ・L・リシ（スペイン、マドリード・カルロス三世大学）
「モデルか、プロジェクトか、ユートピアか？　プラトンの政治思想における『国家』の位置」
アルノー・マセ（フランス、フランシュ―コンテ大学）
「コメント：プラトン、政治の特殊性と都市国家の建造」

魂パネル
フランチェスコ・フロンテロッタ（イタリア、サレント大学）
「『国家』第四巻と第九巻におけるプラトンの心理学：魂にはいくつの部分があるのか？」
クリストファー・ギル（イギリス、エクセター大学）
「プラトン『国家』における魂の三部分説の論点は何か？」
オリヴィア・ルノー（フランス、パリ大学）
「『国家』における気概の機能」
カルロス・スティール（ベルギー、ルーヴァン大学）

「コメント」

<u>分科会</u>

ヴィシュワ・アドゥルリ（アメリカ、ハンター・コレッジ）
「エルであることの重要性」
サラ・アーベル＝ラップ（アメリカ、ミシガン大学）
「ソクラテスの世界都市」
カロリナ・アラウジョ（ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学）
「『国家』第五巻におけるデュナミス（能力）の定義とその議論における役割」
ダーク・バルツリー（オーストラリア、モナシュ大学）
「哲人女王の新プラトン主義的擁護」
ミュルテ・バルテルス（オランダ、ライデン大学）
「支配者の報酬：報酬獲得術の機能」
ヒュー・H・ベンソン（アメリカ、オクラホマ大学）
「プラトンとアリストテレスにおける仮設ならざる第一原理としての善のイデア」
ベアトリス・ボッシ（スペイン、マドリード大学）
「なぜプラトンは、善を獲得するよう人々を説得するのに、快楽を用いるのか？　『国家』第九巻 580d-588b 再考」
クサンティッペ・ブウロジアニ（ギリシア、クレタ大学）
「プラトン『国家』における魂の一性と部分」
アンバー・カーペンター（イギリス、ヨーク大学）
「知っている状態を求める奮闘の判断」
アンジェロ・カサノヴァ（イタリア、フローレンス大学）
「プラトンのミーメーシスと理想国の建設：冗談と真面目さ、整合性と矛盾」
ジョヴァンニ・カゼルターノ（イタリア、ナポリ「フェデリコ２世」大学）
「イデア、ベッド、そして徳」
ブノワ・カステルネラク（カナダ、シャーブルック大学）
「ポリスにおける哲学者の落下、一つの必要悪（『国家』第６巻 491a-497a）」
ニコス・カララボプーロス（ギリシア、パトラス大学）
「夢、大地から生まれること、金属：なぜ理想国は建国神話を必要とするのか（『国家』第３巻 414b-415d）？」
ガブリエレ・コルネッリ（ブラジル、ブラジリア大学）「聴いて分け合う都市：プラトンの『国家』の考古学」
ミケーレ・コラディ（イタリア、ピサ大学）
「『プロタゴラス』から『国家』へ：プラトンと文学や教養に関するプロタゴラスの省察」
イヴァナ・コスタ（アルゼンチン、ブエノスアイレス大学）
「『国家』第四巻における相対的なものの議論：理知的部分と欲望的部分」
シルヴァン・デルコミネット（ベルギー、ブリュッセル自由大学）
「性格と生の選択」
ピエール・デストレ（ベルギー、ルーヴァン大学）
「洞窟の比喩における詩」
ルイ＝アンドレ・ドリオン（カナダ、モントリオール大学）
「『国家』におけるソクラテス的論駁への批判（第７巻 537d-539d）」
アルフレッド・ダンシャーン（オーストリア、ウィーン大学）
「『国家』第九巻における哲学者と文献学者」
ディミトリ・エル＝ムル（フランス、パリ第一大学）
「プラトン『国家』における善のイデアの倫理的重要性」
メフメット・エルジネル（トルコ、東地中海大学）
「魂の欲望的部分はどれほど怜悧か？」
ミヒャエル・エルラー（ドイツ、ヴュルツブルグ大学）

「引用と議論：正しい人の幸福のための第三の議論（第九巻 583b-588a）と『ピレボス』（42c-44d）における不平家」
フランシスコ・ゴンザレス（カナダ、オタワ大学）
「プラトン『国家』における政治と（しての）哲学：古代と現代の諸解釈」
ラウル・グティエレス（ペルー、ペルーカトリック大学）
「洞窟帰還と同一性それ自体の知識」
エドワード・ハーパー（アメリカ、ジョージア大学）
「全体の知識」
マルティン・S・ハルプスマイアー（ドイツ、ベルリン・フンボルト大学）
「そして確かに詩によってでもない：『国家』の真似を事とする詩への批判と、いかに最善の生を選ぶべきかという対話篇の中心問題との関連」
ヴェリティ・ハート（アメリカ、イェール大学）
「偽りと無知；真理と単純さ」
アレシュ・ハヴリチェク（チェコ、ジャン・エヴァンゲリスタ・プルキヌェ大学）
「正義、善と問答法」
エティエンヌ・エルメル（プエル・トリコ、プエル・トリコ大学）
「『国家』におけるオイコス（家）の政治的改造：家族から家族のモデルへ」
ホ・フアクエ（台湾、中国文化大学）
「芸術教育と魂の三部分」
アニー・ウルカド（フランス、ルーアン大学）
「『国家』（第１巻 348b8-348e4; 第４巻 428a11-429a4）におけるエウブーリア（計らいの上手）」
岩田直也（日本、京都大学）
「対象の分析：『国家』第５巻におけるプラトンの認識論」
和泉ちえ（日本、千葉大学）
「プラトン『国家』における立体幾何学の役割」
マーク・A・ジョンストン（カナダ、マックマスター大学）
「プラトン『国家』における理性的欲求」
トリイン・カラス（エストニア、タリン大学）
「『国家』の翻訳によって形作られたプラトンのイメージ」
ラチァナ・カムテカー（アメリカ、アリゾナ大学）
「ソクラテスの正義擁護における倫理と政治」
近藤智彦（日本、秋田大学）
「プラトン『国家』における正義論に対するクリュシッポスの批判」
アニー・ラリヴェ（カナダ、カールトン大学）
「僭主エロース：アルキビアデス、『国家』における僭主のモデル」
アイカテリニ・レフカ（ベルギー、リエージュ大学）
「哲人守護者のエウダイモニア（幸福）」
マリア・リアツィ（ギリシア、イオニア大学）
「『第七書簡』の記号論に向かう『国家』におけるプラトンの記号理論」
アレクサンダー・ジョージ・ロング（イギリス、セント・アンドリューズ大学）
「『国家』第８巻における政治的分析と正義の擁護」
トスカ・リンチ（イギリス、セント・アンドリューズ大学）
「《革新を企てないこと》：和音と政治の間の、法からの倫理的・美的逸脱の危険についてのプラトンの憂慮」
マシュー・マリオン（カナダ、モントリオール・ケベック大学）
「『国家』における問答法的ゲームの役割」
メアリー・マーガレット・マッケーブ（イギリス、ロンドン・キングス・コレッジ）
「見よ、確かめよ（Look, see!）：プラトンの道徳的ビジョン」
マーク・L・マックフェラン（カナダ、サイモン・フレーザー大学）

「『国家』の神々」
アントニオ・ペドロ・メスキータ（ポルトガル、リスボン大学）
「プラトン『国家』第７巻におけるイデアを証拠立てること」
マウリツィオ・ミリオーリ（イタリア、マチェラタ大学）
「『国家』の複雑性と統一性：理論的基層」
ゲオルギア・ムールーツー（ドイツ、ベルリン・フンボルト大学）
「洞窟の比喩：方法と帰還」
トマス・ムロス（ポーランド、ジエロナ・ゴラ大学）
「ポーランド哲学におけるプラトン『国家』の受容と政治的観念」
ジェラルド・ナダフ（カナダ、ヨーク大学）
「『国家』における哲学的・詩的霊感」
ジョゼフ・Ｓ・オライリー（日本、上智大学）
「プラトンの善についての議論に対するハイデガーの可動的評価」
スザンヌ・オブドゥルザレク（アメリカ、クラルモント・マッキーナ・コレッジ）
「僭主エロース：『国家』における哲学的情念と魂の秩序づけ」
荻原理（日本、東北大学）
「エルの神話における生の選択」
マリア・テレサ・パディラ（メキシコ、メキシコ国立自由大学）
「『国家』第５−７巻における数学と哲学的問答法（ディアレクティケー）」
リディア・パルンボ（イタリア、ナポリ大学）
「『国家』におけるミーメーシス」
リチャード・Ｄ・パリー（アメリカ、アグネス・スコット・コレッジ）
「悪徳と魂の一性」
リチャード・パターソン（アメリカ、エモリー大学）
「『国家』における一性と善」
アンドリュー・ペイン（アメリカ、セント・ジョゼフ大学）
「『国家』第２巻における善と諸々の善きものの区分」
ロザリー・ヘレナ・デ・スーサ・ペレイラ（ブラジル、サンパウロ・カトリック大学）
「アヴェロエスの『プラトン『国家』注解』における支配者の本質的特性」
イヴィンド・ラバス（ノルウェイ、オスロ大学）
「魂の諸部分と熟慮」
マリオ・レガリ（イタリア、ピサ大学）
「オデュッセウスの館とソクラテスの都市：『国家』第３巻（389b2-d6）の真理に関する部分」
ダニエル・レグニエ（カナダ、セント・トマス・モア大学）
「『国家』の分割された想像力：エイカシアー（影像知覚）と思考から表象まで」
フランソワ・ルノー（カナダ、モンクトン大学）
「正義、反論理と類比：キケロの『共和国』第三巻と『国家』」
トマス・Ｍ・ロビンソン（カナダ、トロント大学）
「不死、イデア論と「プラトン主義の二つの柱」」
リヴィオ・ロセッティ（イタリア、ペルージア大学）
「古代の（そして現代の）『国家』の説明」
デイヴィッド・Ｔ・ルニア（オーストラリア、メルボルン大学、クイーンズ・カレッジ）
「『国家』における「神に似たものとなる」というテーマ」
佐野好則（日本、国際基督教大学）
「『国家』第４巻におけるプラトンによる正義の定義の背景」
マリア・イザベラ・サンタクルーズ（アルゼンチン、ブエノスアイレス大学）
「『国家』第４巻における性質と関係」
バーバラ・サトラー（アメリカ、イェール大学）

「プラトン『国家』における存在論的、かつ教育的ミーメーシス」
サムエル・スコルニコフ（イスラエル、エルサレム・ヘブライ大学）
「大きな文字と小さな文字――そしてその向こう」
関村誠（日本、広島市立大学）
「『国家』における尺度と像」
ニコラス・スミス（アメリカ、ルイス&クラーク・カレッジ）
「トラシュマコス：診断と対処」
ルカス・ソアレス（アルゼンチン、ブエノスアイレス大学）
「『国家』第４巻における魂の内乱と政治の心理化」
アレッサンドロ・スタヴル（イタリア、ナポリ「東方」大学）
「『国家』における「～と見える」と「真理」」
ヤン・サイフ（アメリカ、カリフォルニア大学デーヴィス校）
「『国家』における二つの中心的議論でのデュナミス（能力）の役割」
瀧章次（日本、城西国際大学）
「プラトン『国家』の中世写本における疑問符の起源と、プラトン対話篇の伝統におけるその重要性」
ハロルド・タラン（オーストラリア、ニューキャッスル大学）
「『国家』第３巻における語りと劇的提示：理論と実践」
アロンソ・トルデシラス（フランス、プロヴァンス大学）
「正義の定義と対話することの技術（『国家』第１巻 338c-341a）
土橋茂樹（日本、中央大学）
「言論における国家建設と国家の浄化」
マウロ・トゥッリ（イタリア、ピサ大学）
「『国家』第３巻におけるミーメーシス：伝統に対するプラトンの関係」
アルヴァロ・ヴァレホ・カンポス（スペイン、グラナダ大学）
「魂における抗争についてのプラトンの理論」
ロズリン・ヴァイス（アメリカ、リーハイ大学）
「『国家』第７巻の支配者は哲学者か」
Ａ・Ｇ・ヴェルシンガー（フランス、UFR 哲学）
「「明瞭であるかのように」：線分の比喩における数学者（『国家』第６巻 510a-）」
ウー・ティアンユェ（中国、北京大学）
「プラトン『国家』における国家と魂の類比に対するバーナード・ウィリアムズの批判再考」
山本建郎（日本、秋田大学）
「善のイデアの新しい／復活した見解」
ヤン・ムーヘム（韓国、トングク大学）
「プラトン『国家』におけるイデアの原理としての善の理解のために、数学はどのように役立つのか」
ムスタファ・ユネジー（イラン、テヘラン・タルビアト・モダレス大学）
「宗教を通じての国家構造へのイニシエーション？　『国家』327a-328b」
ユウ・ヒョク（韓国、ソウル国立大学）
「自分自身に属することをすること：正義と機能的差異化の原理」
アナスタシア・ゾロトゥキナ（ロシア、モスクワ州立大学）
「『国家』と『カルミデス』におけるソーフロシュネー（思慮節制）：教説的、アポリア的観点」
フェデリコ・ズオロ（イタリア、パヴィア大学）
「『国家』の政治的理想主義：ユートピアとイデア論」